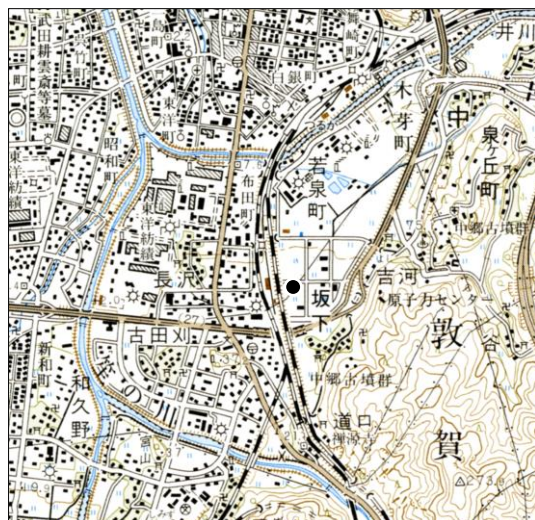


おおまちだいせき
13. 大町田遺跡

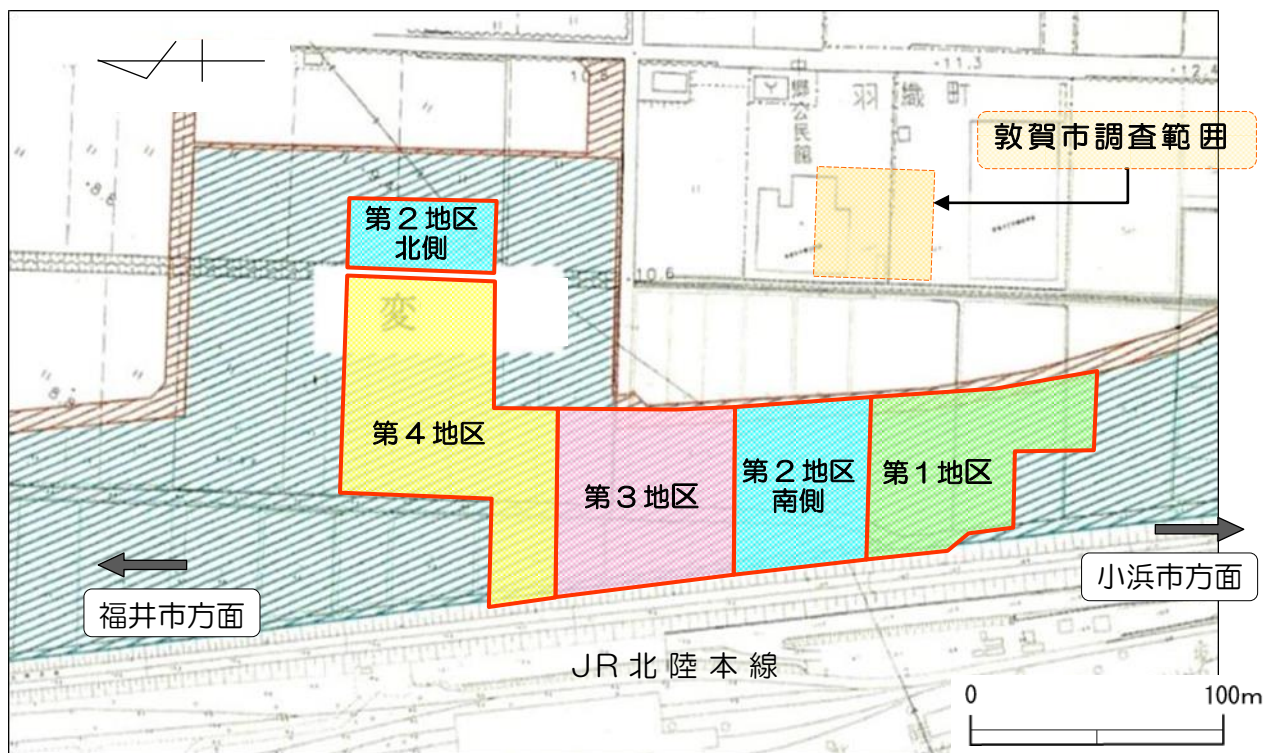
所在地：敦賀市羽織町・樋之水町
調査原因：北陸新幹線建設事業
調査期間：平成 29 年 4 月 3 日～12 月 28 日
調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
調査面積：18,000 m²：第 1 地区 3,600 m²
第 2 地区 4,200 m²
第 3 地区 4,900 m²
第 4 地区 5,300 m²
時代：弥生時代後期～古墳時代前期、古代、
中世、近世



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 敦賀市東部から南東部にかけての扇状地・丘陵には多くの遺跡が存在し、国道のバイパス工事や史跡整備などに伴い発掘調査が行われてきました。大町田遺跡も、^{しょう}筥の川が形成した扇状地上に立地し、過去の分布調査によって弥生～古墳時代の遺跡として知られています。平成 20 年には、^{なかごう}中郷公民館建設に伴い敦賀市教育委員会が発掘調査を行い、弥生時代後期から古墳時代前期の建物跡や多量の土器を確認しています。

今回、北陸新幹線建設工事に伴い、18,000 m²の面積を第 1～4 地区に分割して発掘調査を行いましたので、地区ごとに概要を報告します。



第 1 図 大町田遺跡調査範囲図 (縮尺：約 1/3,000)

【第1地区】

遺構 第1地区は、調査区の南端にあたり、標高は9.5m前後を測ります。弥生時代後期から古墳時代前期の掘立柱建物1棟(SB1)、竪穴建物11棟(SI1~11)の他、溝、土坑(ある程度の大きさ・深さの穴)、小穴など多数の遺構を検出しました。竪穴建物の形は、いびつなものもありますが、方形や四隅を丸くした方形が多く、近い場所で建て替えを行っていたようです。建物の内、SI1では柱穴の底に土器を並べて埋めており、建築に関する儀式を行ったものと考えています。第1地区では、建物は主に中央から北東部で見つっていますが、建物が建っていた範囲は、第2・3地区にまたがる川の南まで広がっており、さらに東の敦賀市教育委員会が発掘した調査区まで一つの集落といえるでしょう。また、洪水などで一時的に流れたような浅い川の岸からは、祭祀を行った後に廃棄した多量の土器がみつかりました。

他に平安、鎌倉、江戸時代の遺構がわずかにあります。平安時代の遺構は、古墳時代より上の層で掘立柱建物4棟分を確認しました。土地の開墾や洪水によって地面が削られ、柱穴の深さは10~30cm程度でした。江戸時代の遺構には、石を組んだ水路があります。水路の石は1~3段分が残っており、幅は280cm、深さは50cmです。ほぼ南北方向に伸びており、江戸時代でも終り頃の用水路または運河の可能性がります。

遺物 弥生時代から古墳時代にかけての遺物は、地元の北陸地方の特徴をもつ土器を主体に、近畿、東海、近江、丹後地方の特徴がある土器がみつかりました。土器の出土量と比べると石製品は少なく、竪穴建物から砥石・勾玉が各1点みつかりました。その他、平安時代の建物の柱穴からは、陶器の皿が、江戸時代の水路からは、少量の陶磁器や寛永通宝1枚がみつかりました。

(野路昌嗣)



写真1 SI1 (南から)



写真2 SI1の柱穴の土器 (南から)



写真3 川岸の土器出土状況 (北西から)



写真4 江戸時代の水路 (南から)

【第2地区】

遺構 第2地区は南北2か所に分かれており、南側地区では河川(川2)と、河川の南東に広がる弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落を調査しました。集落内には、全部で13棟の竪穴建物(SI1~9)と2棟の掘立柱建物(SB1・2)のほか、多くの土坑や溝などがありました。建物のなかには、同じ場所で建て替えられているもの(SI2:3棟、SI4・5各2棟)や、場所が重なっているもの(SI8・9など)があり、長期間にわたって人々が生活していたことがうかがえます。土坑のうち2基(SK348・380)は、お墓(土坑墓)の可能性がありますが、SK348では、遺体を納めた木棺の痕と考えられる炭の層がみつかりました。北側地区の調査では、河川1条、溝3条(SD1~3)、土坑1基がみつかりました。

遺物 第2地区では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器が大量にみつかりました。特に、川2の集落側(右岸)川底から、転落した状態の土器が多く出土しました。土器以外のものとしては、SK380から連なった状態の管玉(破片も含めると16点)が、SD1からヒスイ製の勾玉がみつかりました。どちらも弥生時代後期のものと考えられます。(安達俊一)



写真5 建て替えられた建物(SI2) (古)緑→黄→橙(新)



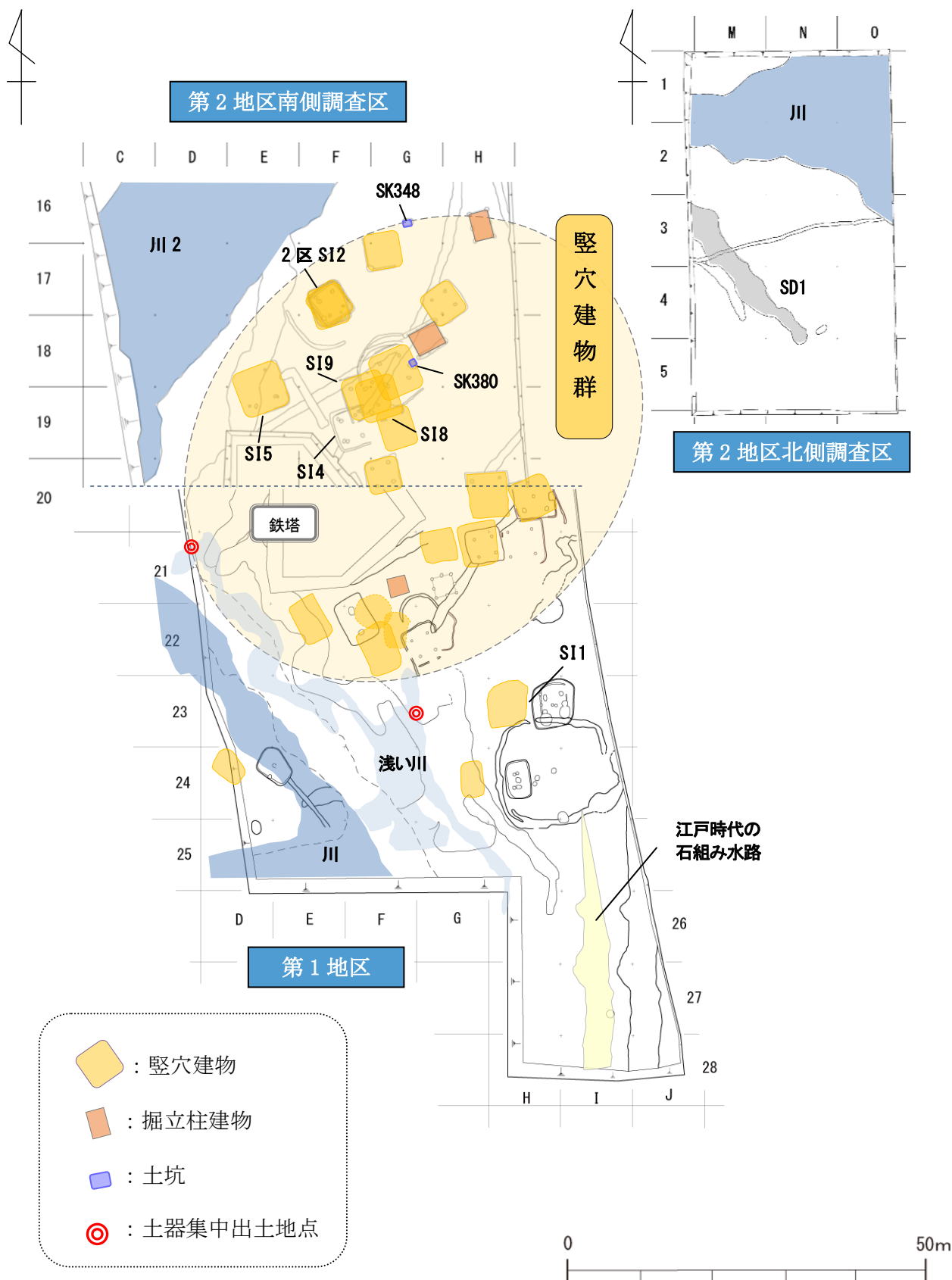
写真6 SD1 勾玉出土状況



写真7 川2 土器出土状況



写真8 SK380 管玉出土状況



第2図 第1地区・第2地区平面略図（縮尺：1/800）

【第3地区】

遺構 当地区の南部には川2があり、南西から北東に蛇行しています。川幅約18m、深さ最大1mで、川の南岸に沿って第1・2地区側の居住域から廃棄された土器が多量に出土しました。川2の北岸では北西部を中心に、建物の柱穴と考える小穴約400基、溝18条、土坑26基などの遺構が集中し、建物として掘立柱建物9棟、竪穴建物3棟が推定できます。掘立柱建物は、一辺2.1～3.9mの方形タイプ5棟、この約2倍の規模がある長方形タイプ1棟、四隅不明の2棟の他、「布掘り」という長辺(桁方向)の柱を溝状に掘った中に配置するタイプを1棟(SB9)確認しました。SB9は5.2m(3間)×4.5m(2間)の規模で、建物の外側には敷地を区画する周溝が円弧状に巡ります。竪穴建物は、溝が確認できるのみです。SI2は一辺2.9mの方形で、掘立柱建物の方形タイプと同規模です。よって、周りに溝をもつ比較的大きな建物(SB9)を中心に、方形の小さな建物が外側を囲むように配される状況がみてとれます。

遺物 川2の出土遺物は、弥生時代後期末の土器が大半を占め、甕、壺、鉢、高杯、装飾器台があります。木製品は川にしては少なく、棒材が数点のみでした。当地区の北西部に位置する遺構の集中するエリアでは、古墳時代前期の土器が多くみつけられました。また、川4の浅い窪みなどには、細かく砕かれた土器片が集中的に廃棄されていました。(櫛部正典)



写真9 第3地区全景(北から)



写真10 SB9と周辺の建物群(東から)



写真11 川2南岸の土器(北から)



写真12 川4の土器出土状況(北から)

【第4地区】

遺構 第4地区は、川2の下流域に相当します。主な遺構は、川2の右岸で見つかった掘立柱建物1棟(SB1)、土坑5基(SK1~5)、溝11条(SD1~11)です。これらの遺構に含まれている土器はSK5を除き、弥生時代後期末から古墳時代前期(今から約1,700年前ぐらい)のものでした。第4地区は第1・2地区と異なり、居住に関する遺構はSB1以外ないのですが、川2を中心として、川1・3・4にも当時のムラの人を使用した土器が大量に廃棄されていました。ただ、それは単純に破損品の廃棄ではなく、土器の破片を観察すると、特殊な割れかたをした破片や出土状況も散見され、川辺の神などを意識した祭祀の意味もあるようです。

遺物 川2の北岸では土器、木製品が多くみつかりました。土器は高杯、小壺、器台といった祭祀にかかわる器種が目立ち、木製品はフタ、田下駄、棒材、板材などがありました。川1では流木に混ざって棒材・板材がみつかりました。川4は第3地区から続き、古墳時代前期の土器が多く含まれていました。鉄道側北東には、さらに集落が広がっているのではないかと考えます。
(鈴木篤英)



写真13 SD1の土器(北西から)



写真14 SK1の土器(南から)

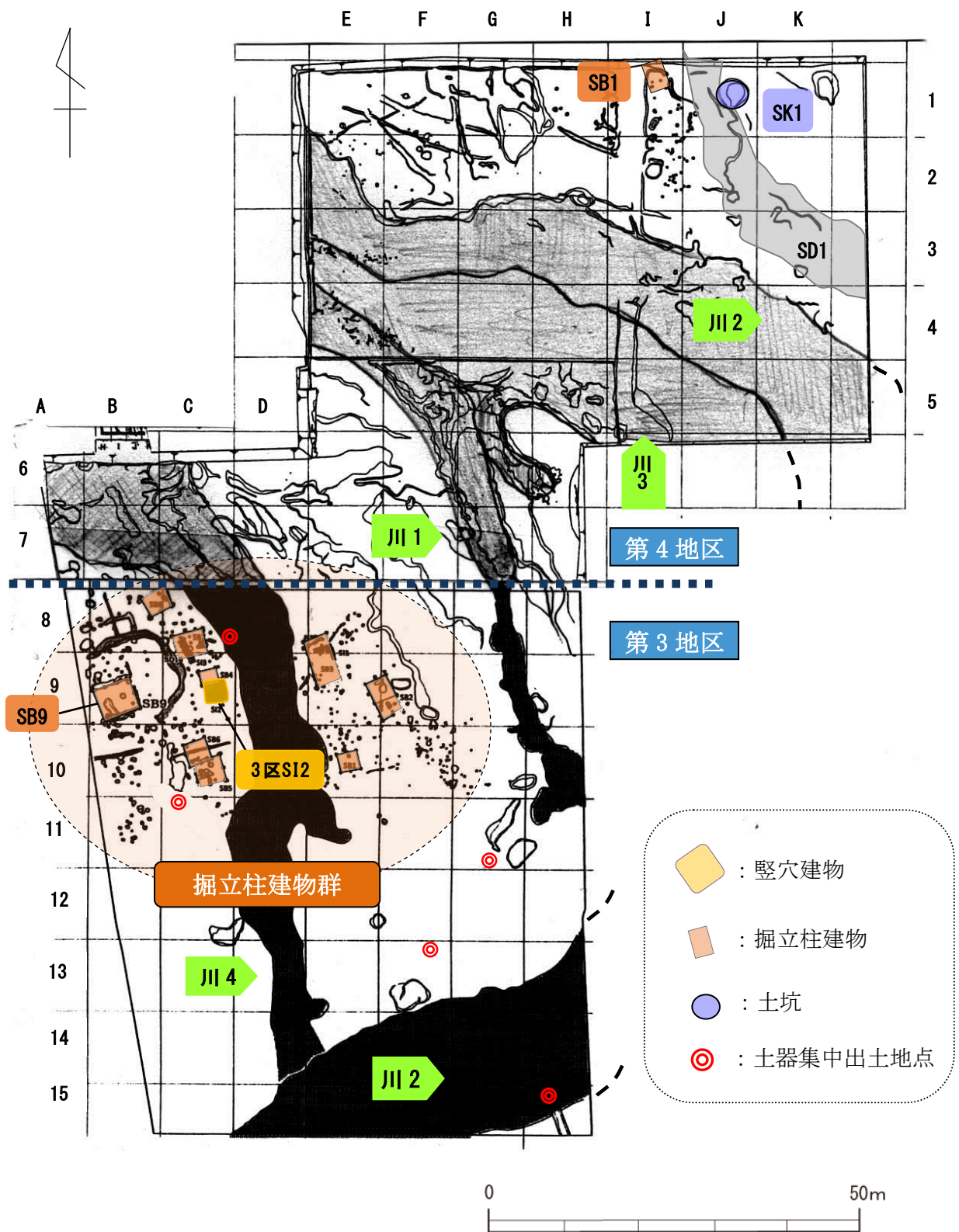


写真15 第4地区川1の流木と木器(北から)



写真16 第4地区川2の楫(南から)

まとめ 弥生時代後期末から古墳時代前期の集落が、川に近い微高地に営まれていました。当時の敦賀では安定して住める場所が限られたため、洪水等に被災しても、同じ場所で復旧し、暮らし続けたようです。他地域との交流という点では有利な環境だったのかもしれませんが。今後、敦賀市内の発掘調査が進めば、各遺跡の環境について比較ができるでしょう。



第3図 第3地区・第4地区 調査区平面略図 (縮尺: 約 1/800)



写真 17 大町田遺跡全景(北から)



写真 18 大町田遺跡全景(南から)